
断罪と終焉の異端者

凸凹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断罪と終焉の異端者

【Nコード】

N8987Z

【作者名】

凸凹

【あらすじ】

少年は逃げ出した。

自分の過去から友の約束から世界から
続ける……自分の決意を果たすために
なのでそれが嫌な方は、リターンしてください。ヒロインはエリー
だから今日も逃げ
これは転生もので、処女作
ぜ

第0話（前書き）

エクスリア転生始めちゃいました。これから宜しくお願いします。

第0話

人間。そう全員まともに生きていけるわけではない。

長寿と言っても『それがどのぐらい』かというのは地域や時代では、
実際自分が思っている以上に、かなり差があったりする。

『人間50年、化天の内にくらぶれば、夢幻の如くなり』

16世紀に織田信長が作った有名な詞だ。

人間どれだけ生きていけたのかが重要ではなく、その生きてきた中
で自分がどう生きていたか。

3

その頃は50歳で立派な長寿と言えた。今の現代で老人と呼ぶには、
少し当てはまらない。中年期と呼んだ方が、相応だろう。

そんな今の日本では、長寿の年齢は75歳。長寿が50だった日本
はいつの間にか、長寿大国と呼ばれている。

別に俺は長寿の分類に入りたいわけではない。別に他の人より長生
きしたいわけではない。

だからと言って、早く死にたいと言っわけでもない。俺はどちらか
と言えば、贅沢な暮らしをしている。だから死にたいと思うほど、
苦しんだことはない。

俺の親父は、とある会社の社長。それゆえに、俺に対する希望の眼差しは多く、大きかった。

親の七光りというやつだろうか。

希望。

将来。

夢。

裕福。

才能。

有望。

信頼。

それらは毎日飢えることなく、むしろ満たされていく。

俺は生きていく中で、人より頑張っていることを自覚した。それこそ満たされていくかのように。

勉強も運動も期待に添えることなく、俺は成長していった。他者から憎まれることも、蹴落とされることもない。

ただ、妬みという感情を持たれてしまった。

聞けばそいつは、俺の親父が経営している元・社長だと聞く。

そしてそいつから親父がしでかしたことを知った。

聞けば親父は株取り引きを失敗し、会社を破綻寸前まで追い込んだ

と聞くではないか。それをどうやら、その上手くその社長の所為にしたという。

そんな中で勿論起きたのは、社長に対する批判。

真実を知らぬまま、社長は会社を辞めてしまった。

しかしそれは、親父が社長になるための『エサ作り』だった。

親父の計画は順調。驚くべきカリスマ性で、力を振り回しながらも、会社の汚名を払拭。

その報酬は妬ましくなるほどの栄光。

一般社員から、社長という昇格。次第には他の会社にも影響を与え、経済に大きな影響を与えたという。

そして俺は親父の所為で、失業した人達の感情を知った。

嫉妬じゃない。言い換えよう。これは嫉妬という名の皮を被った憎しみだと。

決して裏表の暗躍をせず、ただ行き場を失った、その場に踏みとどまる負の感情の塊だと。

俺は初めて知った。

俺は初めて苦しんだ。

俺に向けられているのは期待の眼差しではなく、その眼差しを覆い被さんとはかりに向けられた、欠けることすらない憎しみがあつたことを。

それでも俺は生きてきた。

死んだらそこで負けだ。人間どれだけ生きてきたかじゃない。どんな風に生きてきたかじゃないか。

織田信長の『人間50年』の詩の素晴らしさをこれ以上知った日はない。それこそ俺ぐらいじゃなかるうか。

「俺は親父の跡を継がない。お前の汚名を被り続ける人生なんてまっぴら後免だ」

「なっ

」

親父に反抗した日はこの日が初めてだと思う。

そうだよ。俺はこいつに都合の良いように動かされてきたロボットじゃないか。七光りなんて物も、俺のネジを回すためのドライバじゃないか。

そうだ。人間50年だ。結局はどう生きてきたかじゃないか。だったら尚更。親父の言われるがまま動くなんて後免だ。

真実を知ってしまった以上、親父の跡を継ぐなんて到底やるうと思わない。

そう思う内に、俺はいつの間にか満たされていた物は次第に蒸発していき、渴いてしまった。

すると心に穴が空いたような気がした。

そう言えば俺って、何のために生きてきたんだっけ。確か親父の七光りがあったからこそ生きてこれたんだっけ？そうだ。俺は親父の汚名があったからこそ生きてこれたんだっけ。いや……むしろ、

生きてしまったんだっけ。

結果の理由とは時には残酷で、皮肉なものだった。

思えばそうだよな。俺は思えば、満たされて生きこれてきたのは、親父のお陰じゃないか。でも親父は、他人をエサにして生きてきたんだ。そしてそれは俺にも分け与えられてきた。

だったら、俺は他人を餌にした。うさぎを餌にする蛇や狼のように生きてきた。

俺、親父と同類？

悩むどころか、悩まされ悶^{もた}え苦しんだ。

そうなんだ……俺は見過ごしてしまったんだ。後悔や反省なんて知らず知らず育った、裕福に満たされるだけの大馬鹿野郎の出来こそないの人間なんだ。

勝手に解釈して納得して、それすら知らなかった、ふざけた野郎なんだ。

生きる価値？どう生きてきたか？ハッ、俺はそれすら無駄にして生きてきたんだ。13年間生きてきて俺は何をしていたってんだ。

他者をエサにすることすら気づかない。それに慣れてしまったクズじゃねえかよ。何を勝手に成り上がってんだよ俺は。

『人間50年』の素晴らしい詩を理解した。理解できたのは俺だけ。自分の理解した答えにまるばつつけずに納得してただけかよ。

知ってしまった後には、もう時すでに遅し。

後悔先に立たず、とは正にこのことであった。

学校で習ったばかりじゃないか。今まで勉強してきた意味ってあったのか？
もしかしたら、それこそ満たして渴かないようにするために生きてきただけ。

正直自分を笑いたくなる。

いつそ棄ててしまえ。

家族も夢も希望も感情を味方も愛も勇気も裕福も才能も家も信頼も
友達も将来も名誉も力も絶望も勇気も罪も後悔も己も人生も

いつそ棄ててしまえ。

そしたら楽になる。渴かされるだけで、苦しまない望まない。

でも、その後はどうしよう。俺、13年間しか生きてないんだっけ？

そんな迷いの中一つの予期せぬ連絡が耳を刺した。

俺は自分の作った疑問に惑われて自滅しようとしていたんだ。何だそれ？俺はまた間違えるところだったのか。

そうか。俺あいつのお陰で、今度は間違えることは無かったんだ。

ありがとうな俺の友達。俺はまた間違えるところだった。

よく考えれば、俺はまた自分の都合の良いように、他人を振り回すところだったんだ。

助けてくれたんだよな。

本当にありがとう。俺、あんたの分まで生きるよ。

そう誓った。はずなのに、不慮の事故が俺を巻き込んだ。

ようやく友のお陰で立ち上がった俺は、今度は自分で夢を見つけることにした。

コック？漁師？裁判官？警察？自衛隊？作家？建築家？医者？声優？思えば夢なんていくらでもあった。それを考えるだけで、なんか新しい自分を知ったような気がする。

そして、それ、は起こった。

俺が横断歩道を渡ろうとした時だった。

その時の信号は青だった。別に危険なんてことはないし、俺は律儀に国際法を守っていた。自分の身を守るために国際法を守るのは当

たり前だろう。それに背けないよう、青の横断歩道を渡るつもりだ。

矢先だった。

まるで律儀に国際法を守っている俺を嘲笑うかのように、一つの巨体が進んできたのだ。

しかも運転手はまるで今から引き殺そうという目で見ていた。

言い換えよう。これは事故ではなく事件だった。おそらく、親父の恨みを俺に晴らしにきたのだろう。

「……………あ」

声ごとかき消された。

“ドガアアアアアアアアアアアア”

第0話（後書き）

どうでしたか？感想などは喜んで受け付けます。それでは来年も良
いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8987z/>

断罪と終焉の異端者

2011年12月28日05時45分発行